○蒔絵・墨流し：粉固め

箸が乾いたら、MR 漆で粉固めをする。乾いているかは息を吹きかけたときに銀粉部分が青っぽく見えないかどうかで判断する。脱脂綿を折り、角を作った状態で塗るが脱脂綿が漆をよく吸うので塗るのが難しい。パレットの上で脱脂綿が毛羽立たなくなるまで漆に馴染ませた後、厚塗りはせず薄く延ばすように塗る。銀粉がうっすら茶色になれば OK。全体にすり込んだら折りたたんだティッシュで全体をくるくるふき取る。ティッシュに漆がつかないくらいまでふき取れたら湿し風呂にいれる。

墨流ししたものは特に色漆や錫紛が落ちてしまうため、力加減が難しかった。なお墨流しの箸はマスキングをはがしてから行った。どうしても修正したい部分がある場合は粉固めの前に竹串で削る。

○加筆

墨流しの箸の粉固めが乾くと色漆で加筆する。筆や竹串を使用した。他の工程同様漆が盛り上がりすぎてはいけないので注意。湿し風呂に入れて乾燥させる。

○銀粉磨き

箸に薄く油（サラダ油を使用）を伸ばし、砥粉で磨いた後呂色粉で磨くと銀粉に光沢が出てくる。砥粉には自転車のタイヤのゴムを裏返し、折り曲げて角を作ったものを使用し、呂色粉には脱脂綿を使用した。呂色粉に砥粉が混ざらないように注意しながら磨く。他の工程とは違い力を掛けて磨く必要がある。

○加筆（墨流しの工程と同様）

【研修の感想】

制作では特に墨流しは仕上がるまでどうなるかわからないワクワクがあり、手作業のならでは面白さが詰まっていた。是非この感動を生徒にも感じさせたいが、授業で実践するためにはいくつか懸念点がある。

まずは準備、予算について、箸は一膳 1,200 円以上、漆の種類を揃えるとなると一年間の授業の予算では足りない。積立式ではない今の学習活動費のシステムでは実践が難しいと考える。

次に成績について、銀蒔絵は前述の予算の観点から実践が難しいと考えると、実践に踏み込みやすいのは墨流しである。こちらは操作が難しく、偶然性が問われる技法であるため成績を付けるのが難しい。他の単元との兼ね合いや、プリントや座学を踏まえた小テストの実施など、方法はあるが、３学期など授業数が少ない学期では実践が難しいと考える。

最大の懸念は指導についてである。漆はかぶれる。強いアレルギーを起こすこともある。手袋をつけるとはいえ、危険は十分にある。また、初めての作業でどの程度やればいいのか、これであっているのかなど不安が多い作業である。今回の研修では、美術教員ばかりの 30 人だったが、そこに指導者が 3～4 人ついていて、それでもあわただしくしていた。果たして高校生 30～40 人を 1 人で指導する現在の体制で行えるかというと、特に安全性を考えると無理をしてはいけないと考える。

以上から、授業での実践は難しいと考えが、実施の可能性があるなら、美術部での指導や、希望者のみのワークショップ形式などで生徒の実情をつかみ、その中で授業に応用する手立てを考えることだと考える。日本の伝統に触れることで感じる文化の奥深さや、偶然現れる形の造形的な美しさを感じられるよい機会となるので、生徒向けの実施を前向きに検討していきたい。